

男子マラソン

● 起伏は得意 自己新

男子マラソンは神奈川県から初参加した原由幸さん(北海道の星槎道都大学陸上部)が、3連覇を狙った平田治さん(奈良県王寺町職員)を抑え、自己ベストの2時間24分03秒を更新して初優勝した。

原さんは25km付近まで平田さんの背を見ながら3位につけ、天理市の折り返し点を過ぎた後、白川ダムに至る長い坂を登る難所で2位に付けていた岡田健志さん(奈良県奈良市職員)とほぼ同時に平田さんを抜いた。その後、2人は並走していたが、原さんはゴール約2km手前で勝負に出て、岡田さんを振り切り単独トップに立ち、15秒の差でテープを切った。

原さんは平地より起伏に富んだコースを得意とする。神奈川県秦野市出身で、実家が山上にあることから得意になった理由に挙げた。「陸上を始めた小学生のころから坂を意識して走るようになったことが大きい」と分析した。

それを知る同大学陸上部の監督に、起伏の多い奈良マラソンを勧められ、北海道から腕試しにやってきての栄冠となった。

それでも予想以上のタフなコース。後半は苦しかったが、粘り抜けた」とレースを振り返った。

フルを走るのには2回目と未知数の器。「このレースで自信がついた。さらに上のタイムを狙っていきたい」と胸を張っていた。



女子マラソン

● 登り坂で一気独走

マラソン初挑戦の武津さなえさん(奈良県平城高一同志社女子)が終盤の競り合いを制して頂点に立った。41km付近の先頭争いで、武津さんは前を行く山口遥さん(AC・KITA)を坂道の手前で捉えた。上りに入って山口さんを抜き去り「これでいける」と確信した武津さんは2年ぶりの優勝を狙う山口さんに23秒差をつけてのゴール。「あの坂道、走った経験はないけど、何度も歩いたところ」見慣れた風景が背中を押した。

今大会は前回2位の山口さん、女子駅伝などで活躍した小島一恵さん(徳島)、さらに実業団チームで活躍する西川生夏さん(兵庫)、マラソン経験のある松浦真里奈さん(兵庫)らがひしめき合い、招待選手の中でハーフマラソンしか経験の無い武津さんは劣勢を強いられるかに思われた。

しかし、武津さんは序盤から先頭集団の中で、激しい駆け引きを演じた。初めてのマラソンとは思えない落ち着きを見せ、終盤のワンチャンスをしっかりものにして優勝の二文字を引き寄せた。

今回のレースで現役を引退するという。4月には東京で社会人となり、新たな一歩を踏み出す。

「基本的に走ることが好き。これからは仕事との兼ね合いを考えて、山口さんのように市民ランナーとして走ることが出来れば」と話した。



男子10^キ。

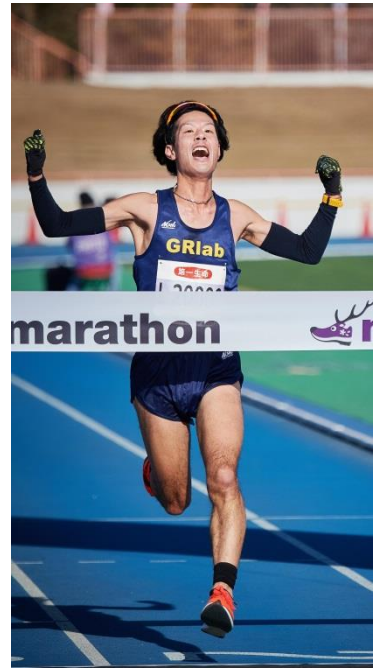
● 雪辱 悔しさをバネに

10km男子は、兼重優介さん(神奈川県)が2度目の挑戦で初優勝を果たした。

初出場の昨年は優勝を居川凌さん(鳥取県)と終盤まで競ったが、競技場の入り口を間違える痛恨のコースミスで4位に終わった。それだけに今大会には並々ならぬ決意で臨んだ。「今年こそ勝ちたいと思っていたので、本当にうれしい」と喜びを爆発させた。

学生時代にも5000mや10000mなどで活躍。現在は会社員で、夏に大阪から横浜へ転勤となった。

3km付近で先頭に立ち、2位に入ったチームメイトの中島広貴さんの追撃を振り切って31分06秒の好タイムで優勝。「30分を目標としていたので、自己採点は99点。残りの1点は来年に残しておきます」と意欲を見せた。



女子10^キ。

● 大会新 会心の笑み

女子10kmは大井千鶴さん(奈良県奈良市、NARA-X)が34分37秒の大会新記録で初優勝した。

大井さんは「前半からいい動きで走れた」と会心の笑みを浮かべた。

スタートからわずか100mで先頭に立ち、そのままゴールまで一直線。「勝つことしか頭になかった」と後続につけ入る隙を与えなかった。

金沢出身で同志社大学を卒業し、現在は佐藤薬品で働いている。同時に「NARA-X」陸上クラブに所属。そのアスリート部門で、2024年にあるパリ五輪のマラソン出場を目指して始動したばかりだ。

大学時代に出会ったコーチに長距離が合っていると勧められ「走ってみたら、苦しくなかった」というのが転機だ。「来年はマラソンで大会新記録をマークして優勝したい。このコースでの大会新記録は価値がある」と早くも来年の大会を見据えた。

